



未来を拓くため使命の育英事業

諏訪郷友会理事長 堀内 敏 宏

長善館創立 125 周年を記念する郷友会会報の発刊にあたり、郷里諏訪の 6 市町村をはじめ関係諸団体・個人の方々、会員各位から賜った、長年のご支援・ご指導・ご協力に、改めて厚く御礼申し上げます。郷友会財政健全化のため卒館生会員を主対象にこの夏からスタートした、育英事業協力の 3 年間倍増キャンペーンにつきましても、続々とご厚志をお寄せ頂き感謝に堪えません。引き続きよろしく願い申し上げます。

育英を使命とする公益財団法人・諏訪郷友会は、その前身である「諏訪青年会」が明治 18 年に発足。旧諏訪藩主家の承認と後援のもと、旧藩校の名称を継ぐ「学生寮長善館」が東京・本郷の地に誕生したのは、6 年後の明治 24 年でした。爾来 125 年。調布市仙川に定着した新世代の長善館は、在京信州関係 6 学生寮のうち最古の歴史と最新の設備を誇り、中規模ながら 41 名の館生が自治の伝統を守りつつ勉学と研鑽に励んでいます。

ところで、少子高齢化が進む昨今、学生寮の将来を危ぶむ向きも無い訳ではありません。

先日信州 6 寮の代表が長野県教育長と懇談した際、県内高卒進学者の将来予測を尋ねてみました。回答は「減少傾向に歯止めはかからないが、経済の先行きを考えると在京学生寮への需要は、増えこそすれ減りはしないだろう」とのことでした。

社会の繁栄を支える経済活力の一つは人口構成

の質と量です。日本や韓国、中国が目覚ましい経済成長を遂げたのは、国内に 15 歳から 60 歳の労働力人口が満ち溢れ、子どもや老人層の比率が低かったからでした。「人口ボーナス」と呼ばれるこのような現象は、高度成長の一方で社会保障などの負担も軽く、その分家計や国の財政に余裕がありました。

しかし、最近の日・韓・中 3 国では、急速な少子高齢化による成長の鈍化と負担の増大に見舞われ、将来を不安視されています。

安倍政権が掲げる“一億総活躍社会”は、こうした状況打破のため、女性や高齢者層の就労促進などと併せ、未来を託す子どもを産み育てやすい環境の整備を目指しています。

限られた人的資源を最大限に生かすには、人への投資・即ち育英が欠かせません。

長善館 125 年の歩みは、とりもなおさず、郷里と東京、先輩と後輩、育てるものと育てられるものが、手を取り合って未来を拓いて来た育英の歴史です。そして、連綿と続くこの育英事業は、信州諏訪が誇る文化遺産、歴史遺産とも言えるでしょう。

日本は今、領土問題や過去の歴史にかこつけて、自国の野望を満たそうとする国々に囲まれ、油断もスキも見せられない状態です。そうした中で、誇り高くこの国と伝統・文化を守り、郷土のために尽くせる人材を育てるためにも、郷友会と長善館に変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、役職員一同と伏してお願い申し上げます。